

「登金陵凤凰台」

報告：花岡風子

1月のお題は李白の『登金陵凤凰台』(金陵の鳳凰台に登る)という作品でした。「金陵」とは今の南京のことです。

南京は歴史の古い都で、三国志の呉の孫権が建業と称してここを都とした後、400年の間に東晋、宋、齊、梁、陳、と六つの王朝の都となりました。3世紀から6世紀にかけての六朝時代、この都を舞台に文化が華やかに開花したのでした。

四川省出身の李白は、25歳の時、725年秋から726年の春にかけてここに滞在し、『金陵酒肆留別』(金陵の酒肆にて留別す)という詩を残していますが、その後、唐の長安に向かいました。長安時代は玄宗皇帝の下で宮廷詩人として活躍したものの、奔放な振る舞いが祟って後に側近達に疎まれ、都を追われます。この詩は長安を追われた李白が流浪の旅の途中に再び金陵の地を訪れたときの作品と言われています。

この作品は律詩の形式で、伝説故事、歴代王朝の歴史、金陵の当時の風景、そして李白の人生、と四つの場面(8句4聯)で構成されています。

全体の意味は、

「鳳凰台にはかつて鳳凰(伝説の瑞鳥)が舞い降りて遊んだと伝えられるが、鳳凰は既に飛び去って、今は空しく長江が流れている。

孫権が治めた呉の都の華やかさは跡形もなく、東晋の都で活躍した官僚たちも既に土となった。

ふと見上げると、三つの山がまるで青空にぶら下がっているかのようだ。視線を下げると長江の流れはふた手に分かれ、白鷺洲(金陵の町並みを指す)を囲むように流れている。

雲が太陽を覆い隠して長安の都が見えないのはなんと切ない」

植田先生曰く「最後の二句、第4聯は李白の恨み節だね。この浮雲とは李白を追いやった意地悪な側近たちのことを指していますね。物理的に長安の都が見えないことのほか、心理的にも長安が遠ざかったことを暗示していると思われます」。「总为浮云能蔽日」(総て浮雲の能く日を蔽うが為に)という表現は『古詩十九首』という中国最古の五言詩集の第一首『行

登金陵凤凰台

作者：李白

fēng huáng tái shàng fēng huáng yóu, fēng qù tái kōng jiāng zì liú。
鳳凰台上鳳凰游，風去台空江自流。wú gōng huā cǎo mái yōu jìng, jìn dài yī guān chéng gǔ qiū。
吳宮花草埋幽徑，晉代衣冠成古丘。sān shān bàn luò qīng tiān wài, èr shuǐ zhōng fēn bái lù zhōu。
三山半落青天外，二水中分白鷺洲。zǒng wéi fú yún néng bì rì, cháng ān bù jiàn shǐ rén chóu。
总为浮云能蔽日，长安不见使人愁。

行重行行』の中に出てくる有名な一句「浮云蔽白日，游子不顾返」(浮雲白日を蔽い、遊子顧返せず)を典故として用いています。

「最後の二句に李白の性格が非常によくあらわれているね。李白というのは人付き合いを疎ましがる人間嫌いな所があって、仙人に憧れる一面もありましたね。そのくせ寂しがり屋で、人がいないのもまたイヤだという面もある。非常にカワイイ性格だね～。杜甫とはまるで違うね」とニコニコしながら植田先生。「人嫌い」で「寂しがり屋」と言う二面性のある厄介な性格も植田先生にかかっては可愛いと映るようです(笑)。

ところで、前回ちよいワルオヤジ崔顥の「黄鶴楼」の詩の紹介を読んでもくださった方は

今回の作品、どことなく似ていると思われませんか？実はこの二つの詩はとても似かよっているのです。

1. 伝説引用から入り、風景を読んでから作者の心情を語ると言う点
2. 対句も何処となく似ている
3. 四聯目の人をして憂えしむというのはまるきり同じ文句

これについては色々なエピソードがあります。その一つは、「李白が黄鶴楼を訪れ、正に詩を詠まんとしたところ、壁に落書きのように崔顥の『黄鶴楼』が書き付けてあった。それを見た李白はその出来映えの良さに「マイッタ！」とばかりに筆を折って去り、のちに鳳凰台に行って同じ様な詩を作った」とか。崔顥という詩人の経歴や素性がハッキリしないので、本当のことかどうかは分かりません。李白という詩人は典故



やパクリ? の名人的なところもあるので、この詩もそうだろうと思われたのか、真相は謎ですが、李白が筆を折って立ち去ったことは『唐才子

伝』という、唐代の詩人や文人のエピソードを集めた書物に載っているそうです。

ところで話が横道にそれますが、この『唐才子伝』、実は中国では書物の一部しか残っていなかったのがなんと日本に全て残っている¹⁾とのことです。実は、中国ですでに失われた文物が日本で保存されていたという例は他にも多数有り、かの有名な『金瓶梅』の完全版も、何と日光のあるお寺で見つかった²⁾ そうです! 「お坊さんがコッソリ読んでたのかねえ」という植田先生のコメントに一同大爆笑。私の頭にも、布団をかぶって金瓶梅を隠れ読むお坊さんの姿がしかと焼きついてしまいました(笑)。

正倉院の宝物にも中国ですでに失われてしまっているものが多々あります。「日本は中国文化の冷凍庫です」と言う先生のお言葉に一同から笑いと納得の吐息が漏れました。

‘わりい’がこれまで関わってきた中国民族音楽演奏者の中には、探し求めていた中国古代の伝統楽器に日本で出会い、復元して演奏している方々が結構いらっしゃるということです。日中の文化は悠久の歴史の中でお互いに絡み合ってきたといえます。

例えば、季節を文学の主題にするのは漢詩の影響と

言えます。万葉集には季節を詠んだ歌は極めて少ないと言われていますが、古今和歌集になると季節がテーマになっているものが多くあります。雅楽もしかり。儒教、仏教のほか、風水、陰陽等、道教の影響も日本文化の中にしっかり根付いています。

「だから日本と中国は仲良くしなくちゃいけない。ケンカしちゃうんだよね」という先生のお言葉に大きく頷いた私でした。

最後に植田先生がヘンな幽霊の絵を黒板に書いて下さいました。これは何かというと律詩を構成する聯の名を覚える為の絵なのです。

第一聯は首聯⇒1, 2句目。「首」とは頭のてっぺんを指す。だからトップの意味にも。

第二聯は頤聯⇒3, 4句目。「頤」はあごの骨を指す。

第三聯は頸聯⇒5, 6句目。「頸」は首すじの意味。

第四聯は尾聯⇒7, 8句目。体がなくていきなり尻尾。

「なんだかゲゲゲの鬼太郎に出てくるオバケみたいでしょう。律詩の形式は、この体も手足もないオバケの絵を思い浮かべれば、たとえ度忘れしても一発で思い出せますね」とのことです。植田先生の楽しい漢詩講義にとうとうオバケの絵まで飛び出しました。仰る通りというわけで今回もあっという間の一時間半を堪能しました。

■注

1) 『唐才子伝』: 元代の西域人、^{しんぶんぼう}辛文房撰。室町時代の五山本を元に、江戸時代に復刻された版本が中国に逆輸入され、完本として定着した。

2) 『金瓶梅』: 日光・^{りんおう}輪王寺慈眼堂蔵本。徳川家康、秀忠、家光を支えた^{しげん}天海僧正の蔵書。『金瓶梅』詞話。

「漢詩の会」たより⑨

(2017年2月19日)

「过故人庄」

報告: 花岡風子

今日のお題は孟浩然の『过故人庄』(故人の荘^{よぎ}に過る)という詩です。

孟浩然と言えば『春晓』、^{しゅんぎやう}春晓といえば「春眠晓を覚えず」ですね。このワンフレーズで歴史に名を刻んだと言っても過言ではありません。小学五年生の息子の国語の教科書にも漢詩の紹介としてこの詩だけが載っています。日中両国民で知らない人はいません。

それほど有名な詩人ですが、一体どんな人生を送った人物なのでしょう。

孟浩然是689年生まれ、740年没、同じ時代の王維より10年、李白より12年、杜甫よりは23年早く生まれています。盛唐の時代を築いた玄宗皇帝の即位した712年、孟浩然是既に23歳でした。一度は玄宗皇帝に仕えようと、友人を介して詩を送るも

guò gū rén zhuāng
过故人庄 作者 : mèng hào rán
 mèng hào rán
 gù rén jù jī shǔ yāo wǒ zhì tián jiā
故人具鸡黍，邀我至田家。
 lǜ shù cūn biān hé qīng shān guō wài xié
绿树村边合，青山郭外斜。
 kāi xuān miàn chǎng pǔ bǎ jiǔ huà sāng má
开轩面场圃，把酒话桑麻。
 dài dào chóng yáng rì hái lái jiù jú huā
待到重阳日，还来就菊花。

の、玄宗皇帝に受け入れられず、一生を隠遁生活で終えた田園詩人です。科挙に受からなかったため、官途に就くことができず、その点では不本意な生涯であったかもしれませんが、唐王朝の全盛期を生き、混乱期を迎える前、740年に世を去りました。その意味では李白や杜甫と違って、幸せな人生を過ごした詩人と言えるかもしれません。田園の自然をのびのびと詠んだ作品が多いのも、恐らくそのためでしょう。王維とは自然派詩人として並び称されました。

李白とも交友を持ちました。李白が故郷の四川から上京する途中、孟浩然と出会い、仙人に憧れを抱く二人は意気投合したそうです。李白の詠んだ『黄鹤楼送孟浩然之广陵』（黄鹤楼にて孟浩然の広陵に之くを送る）は、黄鹤楼の名と共に、二人の交友ぶりを示す作品として大変有名です。

さて、『春晓』の詩からも何となくノンビリした性格と暮らしぶりが伝わって来ますね。

『过故人庄』では、長年付き合いのある農家の友人宅に招かれ、酒を酌み交わし世間話を楽しむ。そのスローライフぶりが映像の様に浮かぶ作品です。

意味を見てみましょう。

旧友が鶏と黍でご馳走を用意して
 自分を百姓家に招いてくれた。
 その村の外れには森が広がり
 遙か彼方にはなだらかな稜線を描く
 山々が見える
 通された小さな部屋からは
 田園風景が広がっている
 酒を飲みながら、世間話をする
 今度は重陽の節句に
 再び来て、菊酒を頂くとしよう

「黍」とは、米、麦、高粱、豆と並ぶ五穀の一つで、当時の庶民にとって一般的な穀物の代表でした。いわゆる主食を指します。「郭」は村と同じ。「郭外」で村の外、という意味になります。「軒」とはよく中華料理屋さんの店名に××軒というのがありますが、ここでは庶民のささやかな住まいという意味です。「桑麻」とは、桑と麻のこと。桑や麻がどれだけ取れて幾らで売れたとかいう、たわいもない世間話を指します。役人や文人たちの利害とは無関係の、庶民の話題という意味です。文人が庶民と交友することを「桑麻の交わり」というそうですね。利害や立場を超えた人間同士の付き合いということ。出典は陶淵明の『归园田居』其二（『園田の居に帰る』その二）にあるそうです。田園詩の元祖と言えば陶淵明の名が思い浮かびますが、この詩からもその影響がなんとなく感じられます。

この作品では、たわいもない庶民の世間話が、辺りの景色にじっくり溶け込み、得も言われぬ太平の世の雰囲気醸し出していますね。

重陽の節句は菊の節句とも言われ、魔除けの意味も込めて酒に菊の花を浮かべて飲む風習があるそうです。菊の花は栄養価も高いそうです。このことから思い出すのは、やはり陶淵明の「菊を採る東籬の下、悠然として南山を見る」く『饮酒』其五（『飲酒』その五）の一句です。

陶淵明が庭先で菊を摘んでいたのは、キク酒を飲むためだったんですね。私もこの話を聞いて、是非、庭にキクを植え、重陽の節句には、お酒に浮かべてみよう！と思いました（笑）。

■参考：『飲酒』其五

結廬在人境	廬を結んで人境に在り
而無車馬喧	而も車馬の喧しき無し
問君何能爾	君に問う何ぞ能く爾るやと
心遠地自偏	心遠ければ地自ずから偏なり
採菊東籬下	菊を採る東籬の下
悠然見南山	悠然として南山を見る
山氣日夕佳	山氣 日夕に佳く
飛鳥相與還	飛鳥 相與に還る
此中有真意	此の中に真意有り
欲辨已忘言	辨せんと欲して已に言を忘る